

犠牲を大きくしたロシア軍戦略転換 ――侵攻開始からの経過を追う――

拓殖大学非常勤講師
伊藤嘉彦

いとう よしひこ 一九七七年生まれ
大東文化大学及び独イェーナ大学卒
拓殖大学大学院国際協力学研究科博士
課程修了。博士（安全保障）。

ロシア軍がウクライナに侵攻して三週間以上が経った。ロシアはこれまでウクライナ周辺やベラルーシにおいて「演習」と称して軍を動員していたが、これがウクライナ侵攻作戦に移行し、ウクライナとの戦争に発展する形となった。

ロシア軍はウクライナの東部（東部）、クリミア半島（南部）、ベラルーシ（北部）の三方向からウクライナに侵入しており、激しい戦いが報じられているが、ロシアのプーチン大統領は開戦当日、「ウクライナの占領は計画に含まれない」と述べていた。しかし、ウクライナ外相クレバはこれに対し、「ロシアがウクライナへの大規模な再侵攻を始めた」と主張し、多くの都市が標的となっていることを指摘して「全面的な攻撃だ」と非難した。

本稿では現在（三月一九日）までの各方面の戦況を概観し、今後の展開を考える。

親ロシア派勢力地域の「独立」から開戦へ

プーチン大統領は二月二日、ウクライナ東方の「ドネツク人民共和国」と「ルガンスク人民共和国」を独立国家として承認、これら親ロシア派勢力地域に「平和維持」を目的として軍を派遣することを承認していた。BBCはロシア軍が「平和維持活動者」としてウクライナに招かれる格好で入り込む可能性が出てきたことを意味すると報じたが、二月三日にロシア軍は「両国」の国境へ部隊を進め、二四日の段階で、欧州連合（EU）のボレル外交安全保障上級代表は、「ロシア軍が既に親ロシア派支配地域に入った」と述べた。独立を宣言した「両国」は、ロシアに軍事支援を要請していたため、ロシア軍による早期の「平和維持」は達成された形となった。

開戦と同時にロシア軍は、ウクライナのインフラと軍事



施設へのミサイル攻撃を行った。これはウクライナ軍のレーダー施設等を狙ったものと思われ、ウクライナ軍の防空能力・制空能力の削減を企図したと思われる。二月二十四日、ロシア軍は空挺部隊で首都キエフ北西のアントノフ国際空港の奪取を試みたが、同空港の確保は翌二五日になり、早期に首都キエフを強襲し、ウクライナ首脳陣及び軍上層部を短期に無力化できなかった。ウクライナ側もキエフの市街地周辺は維持、第二の都市ハリコフでは、「市街に侵入したロシア軍を撃退した」と州知事が伝える（二月二十七日）など、激戦が続いている。

開戦翌日の二五日には、ロシア軍がチェルノブイリ原子力発電所を占拠した。ベラルーシ国内でドニエプル川を西岸に渡り、国境を越えてキエフを目指せば、すぐにチェルノブイリに至る。だがロシア軍地上部隊の前進は順調ではなく、三月四日にはキエフ北西六〇キロのボロディアンカで戦闘の末に撃退され、同日にはキエフ北西のゴストメルでも装甲車両の隊列が撃破されるなどしている。

キエフをめぐる戦線は膠着

首都キエフでは市民がバリケードを道路に設置し、土嚢を積み様子が報じられており、市街地中心付近はウクライ

ナ側が掌握していると考えられる。しかし三月七日、キエフ郊外のイルピン地区で、「キエフ郊外へ避難する民間人に対してロシア軍が攻撃」と題する動画がウエブサイトに掲載された。ここは先のアントノフ国際空港とキエフ北西部外縁を結ぶ地点にあることから、三月七日の段階でこの周辺が戦闘の境界になっていたと思われる。三月一日には、同地区で米国人ジャーナリストがロシア軍の銃撃に遭い死亡したことから、キエフ北西地域は戦線があまり動いていなかった可能性がある。

また、ロシア軍はキエフ北東部からも迫りつつあり、キエフ北西からと、首都を流れるドニエプル川をはさんだ北東からキエフ市外縁への侵入を漸進的に試みている。三月一日、北西のロシア軍はキエフに一五キロまで接近したと報道されたが、キエフ北東約三〇キロのプロヴァルイでウクライナ軍に急襲され、損害を出したとされる。しかし一六日、ロシア軍はキエフに向けて爆撃を行い、スビャトシンスキー、ボディルスク、オソルキー各地区など、軍事施設ではない場所にも被害が及んだ。

一方、南部のクリミア半島から発したロシア軍の攻勢は一定の成果を見せており、開戦直後には黒海に浮かぶウクライナの島ズミイヌイの守備隊を降伏させ、クリミア北部

から進軍を開始し、占領地を増やしていった。三月四日には南ウクライナのザポリージャ原子力発電所が制圧された。加えてクリミア北西ヘルソンのウクライナ軍基地を奪取、ヘルソン州全域を掌握した。

また、アゾフ海沿岸のマリウポリでは、ロシア軍が包囲する形で両軍が激戦を繰り広げたが、三月五日には住民が安全に避難できる「人道回廊」の設置が取り決められた。しかし砲火はやまず、ロシア・ウクライナ双方が非難し合う状況で住民の避難が滞った。結局、激戦を経てさらなる犠牲者を出した後の三月一四日に避難が開始されることになった。一八日現在、ロシア軍はマリウポリの包囲を狭めており、市中心部で戦闘が行われている。南東部では、クリミア発ロシア軍部隊と親ロシア派掌握地域である「ルガンスク人民共和国」「ドネツク人民共和国」に進駐したロシア軍の連絡は、既に容易であるように見える。

一方で、ヘルソン陥落後のロシア軍の動きはまだ不透明だ。一部はさらに北西に進出している模様だが、西部の港湾都市オデッサの攻略を準備しているという情報もある。ロシア軍がオデッサ北東を奪取した場合、当地から北進すれば、ウマニ経由でキエフ南部に到達する交通路が手に入る。オデッサでは住民の避難が始まっており、ロシア軍南

方面の今後の動向は注視するに値する。

これまで比較的平穏だったウクライナ西部の諸都市にも、三月一日にはロシア軍の攻撃が加えられるようになり、キエフ西方の都市ジトーミルが空襲を受けた。また一日、ウクライナ西部リヴィウ州では、ポーランドとの国境に近い演習場である「国際平和維持安全保障センター」にミサイルが着弾した。ポーランドは二月二六日の時点で国境を開放し、避難民を受け入れているが、一方でポーランドから入国・移送されたであろう西側諸国からの「義勇兵」や武器がリビウに集まる可能性が高い。ウクライナ軍の戦力増強を妨げたいという、ロシア軍の目的が感じ取れる。

戦略転換により犠牲増の恐れ

侵攻二―三週間を過ぎ、ロシア軍の砲撃・空爆が市庁舎や民間住宅と思われる施設に着弾している映像が散見されるようになっていく。つまり、開戦時のように軍事施設を精密に狙い、早期にウクライナの戦争遂行能力を無力化して大都市を占領するといった「戦略目標」を達成できず、作戦の時間軸をずらし、地道に市街戦で占領地を漸増させる方針に変更した（もしくはそうせざるを得なくなった）

可能性がある。キエフではロシア軍によって長距離からの市街地砲撃が行われており、ロシア側が早期のキエフ確保を断念し、長期的な戦略に転換した可能性を示唆している。これは第一次チェチェン紛争において、ロシア軍が市街戦で多くの被害を出したことも教訓にされている可能性もあるが、ロシア大統領府の報道官ペスコフは三月一五日に「主要な都市を掌握する可能性を排除していない」旨を発言している。

また「人道回廊」の設置は、かつてロシアがシリア内戦時に都市アレップで提案したことがある。三月一〇日、ロシアはキエフ、スミイ、ハリコフ、マリウポリ、チェルニーヒウで「人道回廊」を設置し、一日は一時的な停戦が行われると発表した。この回廊は、住民に対し安全地帯への避難を促したと思われる。しかし、残る者は「戦闘員」と判断され、攻撃の対象とされる可能性が高くなる。実際に三月一六日にはマリウポリで、市民が避難していたとされる劇場が攻撃を受け破壊された。

こゝまで、三月一九日現在に至るロシアのウクライナ侵攻を俯瞰してきた。ロシア・ウクライナ間の停戦交渉の行方は、戦況の推移と連動して変わってくると思われる、引き続き注視が必要である。●